

東日本大震災

被災者の支援へ 心をひとつに

未曾有の被害をもたらした東日本大震災。被災者の支援と地域の復興へ、国と自治体の役割が問われています。大阪自治労連は震災後、各地で被災者の支援活動に取り組んでいます。自治体労働者の心をひとつにして、支援と復興に全力をあげましょう。



南海泉佐野駅前支援のカンパを訴える泉佐野市職労の青年。左が竹内さん

「希望を捨てないで」

阪神大震災で被災した組合員が支援カンパ訴え

10歳の時に阪神淡路大震災で被災した泉佐野市職労・保育士の竹内俊平さんも、募金箱を持って街頭に立ちました。「あの時、私の家も焼け、幼い弟妹を連れて瓦礫の中を命がけで逃れました。焼け野原になった土地に母が立ち、ぼう然としていた姿は忘れることができません。街頭では、募金をしてくれる方々の優しさにふれ、本当に涙が出ました。被災地のみなさんも、希望を捨てないでください」と語ります。



南港ポートタウンで支援カンパに取り組む大阪市労組

寝屋川市職労
職員支部幼稚園分会

細川 好子さん

分会長・養護教諭
(写真右)

岡庭 美坂さん

副分会長・養護教諭
(写真左)



園児たちが、ホッとできる存在 ：それが養護教諭なんです。

子どもたちと 生活を共にして

「幼稚園では、子どもたちの中にどろんどろん入っていった生活を共にしてるんですよ。養護教諭の仕事は、園児たちが生活習慣をしつかりと身につけられるように援助すること。子どもと保護者の心のケアもしています。」

での排泄など、生活に必要な基礎を教えます。園児の中には、毎晩10時過ぎまで起きていたり、朝食を菓子パンだけで済ましてくる子もいます。遠足に出かけるとすぐにバテてしまう子も。「でも、トイレでパンツを汚していた子が、清潔に排泄できるようにしたり、手洗いを覚えた子が、家で親に教えるようになったりしているんですよ。一人ひとりの成長を親子とともに実感できて、

とてもうれしいです 少女時代にふれた 保健室の先生

「今日の仕事は、門前でのあいさつから始まります。「毎朝、登園する子に『おはよう！』って声をかけると、最初はあいさつでがきなかつた子も、『おはよう』と返してくるようになるんです。こんなところからもコミュニケーションの力をつけてくれれば、と思っています」

養護教諭になったきっかけは、二人とも少女時代の体験から。「中学生の時でした。自分を受け入れてくれた保健室の先生がいたんです。そのまなざしに包容力を感じて、私もそんな人になりたいと思ったんです」と岡庭さん。細川さんも「小学校の時、友だちのお母さんが養護教諭で、私にとても優しく接してくれたんです」と語ります。「今の世の中、きゅうくつ

な思いをしている子どもがたくさんいます。そんな子どもたちの心に寄り添っていきたくて、ホッとできる存在。それが養護教諭なんです。」

子どもたちのためにも 職場を守りたい

寝屋川市では2年保育の実施が始まった年に、全園で養護教諭の専任化を実現。職場から要求をあげ、労働組合の力がかちとりました。しかし

一方で、昨年から技能職員がいなくなり、外からの訪問者に対応できる専任の職員も不在になっています。

「子どもたちのためにも、先輩たちが築いてきた職場を、これからも守っていきたくて」と細川さん。岡庭さんも「寝屋川の子育てを支援できる公立幼稚園となるように、職場をもっとよくしていきたい」と抱負を語ります。